

「西洋諸国の都府には文庫あり。『ビブリオテーキ』と云う。日用の書籍図画等より古書珍書に至るまで万国の書皆備り、衆人来たりて随意に之を読むべし。……（後略）……」

（福沢諭吉『西洋事情』、慶応2年・1866）

上記は西洋の図書館に関する記述です。この書籍は日本初のベスト・セラーと呼ばれるもので、『学問ノススメ』（1872年）の発行部数70万部には及びませんが、15万部も売れたそうです。当時の人口が3,000万人強ですから、およそ200人に一人は読んだという計算になります。しかし、米1升が5銭の時代に50銭という高価な書籍（現在の感覚で1万円近い）となると、庶民層にとっては高嶺の花です。読者の大半は、いわゆる富裕層・エリート層に限られました。とはいえ、国民の大多数が文字を読み書きすることができたというのは驚くべきことであって、明治の文明開化（西洋文明の摂取）を可能にしたのも、この基礎的な教養があればこそです。

さて、明治初期の京都においては殖産興業が死活的な課題であり、教育を通じた人材の育成や職業能力の向上を図ることが急務でした。その表れが、全国初の小学校創設をはじめ、英学校や洋学校（後に欧学舎に統一）、さらには女子教育のための女紅場^{によこうば}の開設といったものです。

因みに小学校における成果を見ると、明治4年に64校・児童数2万5千人であったものが、明治10年になると470校・6万人強へと急増しています。京都府の施策もさることながら、府民の理解と協力も絶大で、まさしく官民一体の賜物でした。府の教育行政に少なからず影響を与えたであろう福沢も、著書『京都学校記』の中で小学校創設を激賞しています。

書林から近代的書籍商へ

当時、各種の学校が開設された時に課題となったのは、必要な教科書を調達することでした。

- 書籍が高価な上に、専門書や洋書となると品揃えもままならない。
 - 児童・生徒全員が教科毎に購入することは現実には不可能。（庶民の家計も豊かでない）
- ⇒ 学校側は、教科書を廉価（月額で書籍価格の50分の1程度）で貸与する方法を採用。

一方、市中の書林（書店）は、これまでは和・漢の書籍（仏教書や儒学書）を中心に営業してきたのですが、新しい時代に対応する必要に迫られていました。そこで学校に代わって教科書を貸与することを請け負ったわけです。書林にとっては、学校は新たな得意先（＝市場）でした。請負いは生き残りのための方策でしたが、併せて文房具類の一手販売も目論んだと伝わります。当然とはいえ、したたかですね。旧来の書林はこうして学校用図書の出版・取次・販売・貸与を一手に引き受け始め、近代的書籍商へと脱皮するのです。（以下、書林を書籍商と呼ぶ）

さて、学校での経験をもとに書籍商は貸本業という分野に進出します。より潜在需要の大きい一般社会人向けの貸本業を本格的に目指すことになりました。当時の代表的な書籍商としては、平楽寺書店（村上勘兵衛）と大黒屋（今井太郎右衛門）が挙げられます。彼らは事業欲が強く、京都府の教育行政に密接に関与しました。今日であれば、官民癒着かと疑いを招くほどですが、とりわけ、日本初の公立図書館と呼ばれる「集書院」の開院に関わったことは有名です。

日本の図書館の始まり

文武天皇の命によって大宝律令が701年に制定され、律令制度の法的秩序が完成しました。この中では「**図書寮**」を置いて、政府文書の保管と国史の編集を行うことが定められています。これが、**図書館に関するものとしては文献上の最初の記述**とされています。

近代的な日本初の官立公共図書館は、明治5年(1872)4月に、東京・湯島の昌平校講堂跡に開設された**東京書籍館**とされています。後には上野に移転し、帝国図書館と改称されました。第二次大戦後には、従来の貴族院・衆議院の図書館と合併して国立国会図書館となったのです。これらの背景には、福沢諭吉の『西洋事情』をはじめとする啓蒙活動や、岩倉遣欧使節団による欧米視察の影響が見逃せないと言われます。余談ながら、東京書籍館が開設された4月30日は「**図書館記念日**」(日本図書館協会制定)とされているのですよ。

貸本業から図書館構想へ

京都府の図書館設立構想に書籍商は深く関わったわけですが、その過程は下記の通りです。

書籍商 (中核は大黒屋と平楽寺書店) **=====** 京都府 (楨村参事を中心とする推進派)

貸本業に進出

- ↓ 【課題】 蔵書の不足……在庫は和漢書のみ。新刊や洋書は書籍価格が高く、入手も困難。
- ↓ 【対策】 京都府に府管轄の蔵書の貸与を依頼 → 許可される
- ↓ 【条件】 利用者から徴収した料金は府に納める。その1割を必要経費として書籍商が得る。

書籍会社を設立 (明治5年3月頃)

- ↓ 【状況】 貸本業が順調な業績を残したので、事業の拡大を目指す。
- ↓ 【対策】 書籍会社設立願いを府に提出 → 許可される
- ↓ 府は、各学校の教科書の調達先を書籍会社に指定するなどの便宜を図った。

集書会社を設立 (明治5年4月)

- ↓ 【課題】 府の公共図書館 (名称は**集書院**) 設立構想に対し、いかに対応するか。
* 府の設立構想に関与したとされる人物は、御雇い米国人教師のポールドウィン、福沢諭吉、山本覚馬の3名で、山本は楨村参事の有力なブレーンであった。
(注: 山本は、新島襄とともに同志社英学校創立にも関与した人物。)
- ↓ 【対策】 集書院設立までの間、受け皿会社として**集書会社**を認めてもらう → 許可される
- ↓ 府の構想に賛同し、府に対し代表者4名で400両(約4百万円)の献金。

集書院に合流 (明治5年9月)

- ↓ 【対策】 集書院設立後も、実務と経営を受託したいと府に依頼 → 許可される
- ↓ 【条件】 地代家賃(月額30円)及び維持管理費は**集書会社**が負担する。

集書院の営業開始 (明治6年5月15日)

建物延べ面積は約500坪で、書庫と閲覧室、事務室からなる西洋式二階建て。閲覧室のある貸本施設という性格のもので、利用料金は一回1銭5厘。

集書院の顛末

明治5年5月、『京都新聞』第二八号に、下記のような内容で発表がなされました。

- 集書会社の設立趣旨と利用方法。(新しい知識を得るには図書を読むべきだと強調)
- ぜひ趣旨を理解し、府民の出資や蔵書の寄贈を願いたい。
- 近く府が集書院を開設する。(三条通り高倉西……現在の中京郵便局辺り)

その結果は、大きな期待と反響とを呼び、篤志家(中には東寺も含む)からは蔵書の寄贈が、府民からは寄付金の申し出が相次ぎました。さらに、この話題が他府県でも報道されたことで、日本各地で図書館設立運動が起きたほどです。教育あるいは書籍というものは、いわゆる文明の証しでした。図書館の存在は文明の一滴に触れるようなものだったことでしょう。

集書院の竣工は明治5年9月ですが、蔵書の運び入れや整理陳列、利用券の準備などを経て、**明治6年5月15日に営業開始**を迎えます。まさに前途洋々の船出でした。

ところが、事の推移は前評判とは裏腹に、喜べるものではありませんでした。即ち、利用客が全く伸びなかったのです。明治13年度の決算報告では来院者が年間734名という有り様で、経費を除いた差引き58円余の赤字を計上しています。おそらく、他の年も似た状況でしょう。

この結果、集書会社は経営から引き上げることになり、同9年には再び京都府の直営に戻ったわけです。そして**同15年には閉鎖**に至り、同23年の京都府教育会附属図書館の開館に伴い、その蔵書を下付したのです。(これが明治31年開設の府立図書館の前身です)

閉院の理由には下記のような要因が挙げられます。明治政府自体が未だ不安定な状況であり、明治10年の**西南戦争**による戦費支出が大打撃となって、財政上も底をついたのが実情でした。京都府にしても出せるような予算は持っていませんでした。ましてや庶民の家計はなおさらで、国民皆教育の方針(明治5年、「学制」公布)に対して、負担増への反発は強かったのです。

- 集書院の蔵書が古書(和漢書)中心で、魅力有る蔵書も少ないという現実があった。
- 京都府の財政難 → 教育振興費削減。欧学舎への補助金打ち切り。
- 書籍商側は主要人物を失う……大黒屋が死去(明治10年)
- 新聞紙条例・集会条例などの言論統制(自由民権運動に代表される政府批判を抑え込む)。
- 集書院支持派が退任……榎村(明治10～14年の京都府知事)が辞職、元老院に転出。

平楽寺書店 (中京区東洞院通り三条上ル) *HPより抜粋

創業は慶長年間(1596～1614)。丹波の武士であった村上浄徳が、京都で書籍商を始めたことが始まりで、後年には出版業も営んだ。大正2年、11代目**村上勘兵衛**が営業の全てを井上治作に譲渡したとのこと。井上は社名を正式に「平楽寺書店」と定め、日蓮宗の書籍や経典を出版した。現在、「出版物による仏教理念の啓蒙と普及」を理念に掲げ事業を展開。

創業が江戸幕府の始まりと同じ頃ですから、相当な歴史ですねえ。代々勘兵衛を襲名し、また平楽寺と号したので、店名に採用されたのでしょう。建物は鉄筋コンクリート造り3階建てで、昭和2年築ながら明治大正期かと思うほどに優美で格式が感じられ、国の登録有形文化財です。所在地は、かつての集書院や集書会社の西側に当たります。